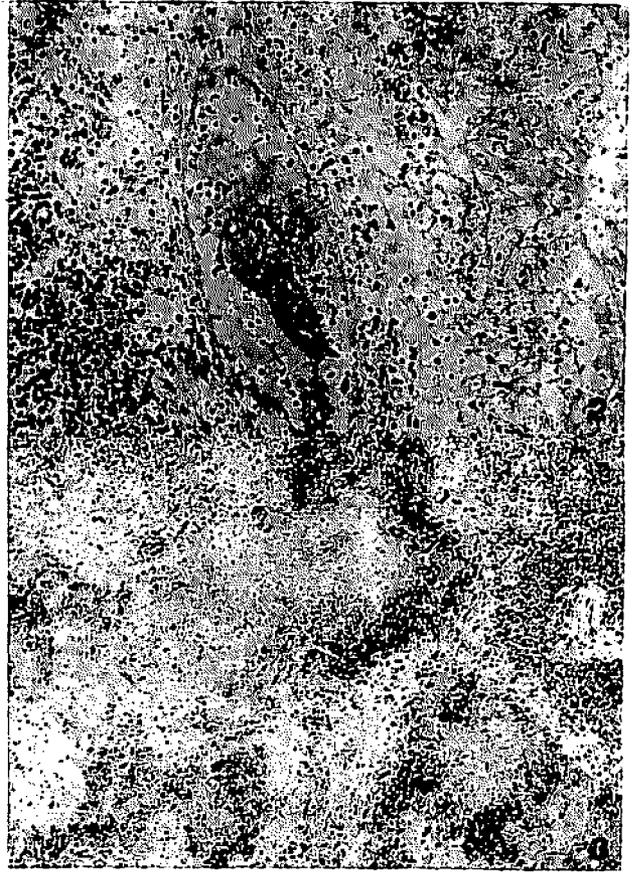


ウサギの脾臓

家畜衛生試験場東北支場出題 第24回獣医病理学研修会標本No.427



動物：ウサギ，雄，5ヵ月齢。

臨床的事項：本例は2ヵ月齢で，悪性カタル熱と診断された死亡牛の10%臓器乳剤6mlを腹腔内接種された。接種3週後に一過性の発熱(40.2℃)がみられたが，その後臨床的な異常はみられなかった。5ヵ月齢で内毒素(*E. coli* 0111:B4, Difco)0.5mgを静脈内接種され2日後に放血殺された。

剖検所見：脾臓は7.3cm×1.3cm×0.7cmと顕著に腫大していた。赤褐色あるいは黄白色で帯状の乾酪病巣が脾臓を横断するように数か所みられた。健全な部分は暗赤色で濾胞は明瞭であった。同様に処置されたウサギ5羽のうち，本例を含めて3羽に同様の脾臓病変が観察された。

組織所見：凝固壊死に陥った領域が顕著に腫大して，脾臓の断面は雨滴状を呈していた(写真1，HE，ルーベ拡大)。壊死領域では漿液成分の滲出により組織がそしょうとなり無構造であった(写真2，HE，×120)。新鮮な出血巣がみられたが，巣内の血管には著変がみられな

かった。PTAHおよびフレイザー・レンドラムのフィブリン染色では壊死領域の赤脾髄，血管の内外，出血巣および境界部が染色された(写真3，フレイザー・レンドラム染色，×48)。健全部では白脾髄には著変がみられなかったが，赤脾髄，脾静脈にフィブリン血栓が散見された。赤髄で好酸性細胞質内封入体を持つ細胞が時折観察され，この封入体はフレイザー・レンドラム染色により赤染することから貪食されたフィブリンとみなされた。脾臓以外では，脳・脊髄に単核細胞の血管性浸潤が散見され，肺で血栓と動脈内膜の増生が観察された。

ウサギにおいてはウイルス，妊娠，ホルモン，アルコールと内毒素との組み合わせで肝臓，副腎，腎乳頭などシュワルツマン機序による凝固壊死や出血壊死が作成されている。本例においても壊死の成因はフィブリン血栓を伴う循環障害とリンパ濾胞の壊死であり，機序はシュワルツマン反応によるものと思われたがその“準備因子”は特定できなかった。

診断：内毒素によって誘発された脾臓の硬塞。